

SEISHIN APPLICATION *CLICK*

—— 適応と前進 ——

Index	P1~P4	【特集】トップインタビュー プライズコミュニケーション 小野綾子社長に聞く 株式会社プライズコミュニケーション 代表取締役社長 小野綾子 聞き手:株式会社フラジュテリー 代表取締役社長 橘田佳音利
	P5~P6	【情報産業】関連情報
	P7~P8	【経済】関連情報
	P9~P10	【コラム】「3つの坂」 誠伸商事株式会社 取締役会長 福田七衛
	P11~P12	【くらし】関連情報

梅のつぼみもそろそろ膨らむ2月となりました。早いもので新しい年を迎えたのが、つい昨日のように感じます。各地の新年会もとどこおりに開催され、本格的な稼働に入りました。

今般全印工連ダイバシティ推進委員会委員長 小野綾子様に、ご多忙の所をお願い致し高説を拝聴致しました。貴重なご意見ですので3月号にも記載いたします。

コラムでは、昨年の意外な事象米国のトランプ大統領政権の誕生等々誰しも意外であったことでしょう。それを取り上げてみました。

(編集部)



梅の香りに春思う(東京都大田区 池上梅園)

(産経新聞2月15日)

誠伸商事株式会社

■特集・コラムに関するお問合せは:CLICK編集部(株)ジーエスアイ TEL.03-5751-3361 まで

TOKYO	03-5751-3011
SIZUOKA	054-340-1191
TOUHOKU	022-299-6661
KITAKANTOU	028-684-1981
NIIGATA	025-286-9040

トップインタビュー

プライズコミュニケーション

小野綾子社長に聞く-1

株式会社プライズコミュニケーション 代表取締役社長
全日本印刷工業組合連合会ダイバーシティ推進委員会 委員長

小野綾子

聞き手:株式会社フラジュテリー 代表取締役社長 橘田佳音利

株式会社プライズコミュニケーション代表取締役社長の小野綾子様は、起業されたわけでもなく、2代目社長でもなく、一社員として子育てをされながら仕事に就かれ、現在の代表取締役社長に就かれました。今でこそ「女性の活躍支援」と世の中が動いていますが、小野社長が就業された36年前には、国の応援もなく、それどころか女性が仕事に就きながら子育てすることに否定的な世の中であったと思います。

女性が働くことへの風当たりが強い時代に、このような偉業をなされたことは並々ならぬ努力があったことと思います。たくさんのご苦労があったはずです。そのような時代を一人で超えてこれたからこそ、そのような経験を積まれたからこそ、「女性活躍支援」へのお考えが出来上がり、現在、全日本印刷工業組合連合会ダイバーシティ推進委員会委員長という要職にも就かれています。

このようなご経歴をお持ちの小野社長に、株式会社フラジュテリーの橘田佳音利がインタビューさせて頂きました。今月号では小野社長のこれまでの仕事・人生について、次月3月号では全印工連ダイバーシティ推進委員長として「ダイバーシティ」や「女性活躍支援」についてのご意見ご提言を、2回に亘ってお届けいたします。(橘田)

《はじめに》

■ダイバーシティ

ダイバーシティとはご存じのとおり「多様性」を示す英語です。性別・国籍・年齢・障害などを問わずに多様な人材を活用することで生産性を上げ、企

業の成長と個人の幸せを同時に目指すという概念です。

安倍首相が「女性が輝く日本を共に創り上げていくではありませんか」と女性活躍推進を宣言したのは2013年の施政方針演説でした。3本の柱として、第1の矢「大胆な金融緩和」、第2の矢「機動的な財政政策」に次ぐ第3の矢である「成長戦略」の中で、「女性が成長戦略の中核をなす」と発表されました。

- 1.2020年までに指導的地位に女性が占める割合を30%に
- 2.上場企業において役員に一人は女性を採用
- 3.待機児童解消加速化
- 4.経済3団体に「3年育休」の推進、職場復帰支援の要請
- 5.主婦の再就職支援

以上が主な内容でした。

■ポジティブアクション

同時にポジティブアクションも継続的に進めていかなければならないことです。ポジティブアクションとは、女性の採用拡大・職域拡大・勤続年数を伸ばす取り組み、管理職登用等、今まで男女労働者の間で生じていた差を解消しようという取組を言います。

ダイバーシティの中にポジティブアクションは位置されているといえます。具体的には、年齢で採用を判断したり、固定的な性別による男女の役割分担意識や過去の経緯から、「営業は男性の仕事」「課長以上の管理職は男性の役目」などの差が男女労働者の間に生じている場合、このような差を

解消しようという取組です。

■ワークライフバランス

仕事と生活の調和が実現した社会とは、国民一人一人がやりがいや充実感を感じながら働き、仕事上の責任を果たすとともに、家庭や地域生活などにおいても、子育て期、中高年期といった人生の各段階に応じて多様な生き方が選択・実現できる社会のことです。

具体的には

- 1.就労による経済的な自立が可能な社会
 - 2.健康で豊かな生活のための時間が確保できる社会
 - 3.多様な働き方・生き方が選択できる社会
- のことを言います。

■女性活躍推進法

そして昨年4月、女性活躍推進法が施行されました。

- 1.自社の女性の活躍状況の把握・課題分析
- 2.行動計画の策定・届出
- 3.情報公表 など。

今回施行された女性活躍支援のポイントは、目標を設定し公表することにあります。これは従業員301人以上の会社に義務づけられました。より現実化させようということだと思います。

《インタビュー 小野社長 仕事・人生》

■最初の就業

橘 田:まず小野社長の仕事・人生の軌跡をお伺い致します。

小 野:たまたま36年前、印刷会社に勤務したこ

とが、今の株式会社プライズコミュニケーションの代表取締役になる最初のきっかけでした。

子供が3歳になって少し手が離れるようになったとき、何か身に着けていこう、と和文タイプ教室に通いました。その教室を経営していたのが最初に勤務することになった印刷会社でした。和文タイプのスキルを磨いていくうちに、その印刷会社に引き抜かれ勤めることになりました。

和文タイプの社員として入社し、時短勤務から始めました。その後和文タイプ教室でタイピストの講師を務め、和文タイプの教室がワードプロセッサの教室となりワープロ講師となり、時代の流れとともにコンピューターへと発展していきました。最終的に、その教室は「秋葉原のパソコンライブラリー」となったのです。

私が勤めた印刷会社は広告代理店業も営んでおり、パソコン向けのパッケージソフトの広告を扱っておりましたので、「パソコンライブラリー」は、そのお客様のためにオープンしたものでした。当時のワープロは専用機で、パーソナルコンピューターとソフトウェアがパッケージになっており、ソフトをインストールして使っていました。ソフトウェアの中身は見るできないので、そのソフトがどのようなかを実際体験していただくためのライブラリーだったのです。

そのうち、そこの運営を任されるまでになり、ここでの講師歴は2年間でした。当時パソコンで何か作るときは、コボルやC言語などのコンピューター言語で作成していましたので、私もこのころは、簡単なソフトは自分で作っていました。

■株式会社プライズコミュニケーション

【会社概要】

名称:株式会社プライズコミュニケーション

所在地:東京都江東区大島2-9-25

設立:昭和48年11月9日

代表者:小野 綾子

従業員数:63名

事業内容:総合印刷業

オフセット印刷業務・製本加工・広告制作業務・SP業務

スパダシ業務(オリジナル商品企画・製造・販売)

【沿革】

昭和48年11月:印刷会社として江東区冬木に株式会社コミネ設立

昭和55年4月:軽印刷会社として株式会社サンプリント設立

昭和56年4月:広告代理店会社として株式会社コミネエージェンシー設立

昭和62年3月:江東区東陽に本社を移転、製本工場を江東区冬木に開設

平成2年5月:江東区富岡に第二印刷工場を開設

平成4年9月:広告代理店事業の効率化を目指し、

デジタルデータ制作会社、株式会社ウエルを設立

平成7年3月:株式会社コミネ・株式会社コミネエージェンシー・株式会社サンプリント・株式会社ウエルの本社を神田神保町に、3か所の工場を集約して江東区大島に移転

平成7年11月:グループ4社を合併して

株式会社コミネコミュニケーションズに社名変更

平成11年4月:本社を神田神保町より江東区大島へ移転

平成18年9月:株式会社プライズコミュニケーションに社名変更

平成24年7月:東京都印刷工業組合 環境推進工場登録

平成28年1月:江東ブランド認定

橘 田:小野社長は、コンピューターができてから女性の仕事が一気に増えたとおっしゃいます。それまでは女性のあこがれの仕事はスチュワーデスカバスガイドというのが一般的でしたが、世の中にパソコンができてから女性が活躍できる職業が増えたとおっしゃいます。「キャリアウーマン」という言葉が生まれたのはこのころだそうです。

■本社での就業

小 野:ライブラリーでたくさんのことを身に付け、本社に戻ってきました。パッケージにしたWindowsが出てきた時期で、世の中はどんどん変わってきました。その頃経理財務のコンピューター化を進めていくことになり、財務を担当するようになりました。必然的に金融機関との対応も担当するようになり、このあと約20年の間、16行あった取引金融機関の担当をすべて一人で行っていました。

1995年に、4つの会社が合併することになりました。神宮前にある広告代理店、江東区内の3か所に所在する印刷会社、それらを統合し本社機能を神田神保町に、そして工場を今のプライズコミュニケーションのあるこの地に構えました。このころ、金融機関との取引において、経費の削減や上場も目標としていたこともあり、深く事業計画に携わっていました。一社一社お客様の回収条件なども考え壮大な表を常に作っていました。

■経営破綻

小 野:そして2000年に会社が経営破綻に陥りました。負債額30億円、内金融債務が20億円、他に税金滞納2億円、延滞金も14.5%で発生した状況でした。このような状況では、外部のスポンサーが

つくはずありません。

再建にあたり次の経営者を決めなければならませんでした。筆頭債権者の銀行と弁護士から3つの条件を提示されました。1.前経営者は責任を取って経営に参加しないこと。2.代表者になる人は、税務当局との交渉ができる人。3.筆頭債権者に財務内容の説明ができる人、の3つでした。当時、前代表のほかに取締役は、財務担当・営業担当・工場担当の3人でした。財務諸表を読めなくても取締役はできるが、代表は読めた方が良いということで、財務担当であった私が社長に抜擢されたのです。

“女だから”ということもあり、税理士の先生も金融機関も債権者も、99%再建できないだろうと思っているのを、明らかに感じていました。“お飾り的な存在でもいいから”という様子が手に取るように分かりました。それでもとにかく民事再生を申請しなければいけないという状況にありましたので、無論事の重大性はわかっていましたが、人がどう思おうと、当時44才、やる気もあったし、負けず嫌いでもあったので、周りから頼られればやってみようかという気持ちになり引き受けました。

裁判を通すための事業計画も自分で作りましたし、10か年計画のビジネスプランも立てました。返済計画から入金予定など、壮大な事業計画で、寝る時間を惜しんでひたすら作成しましたね。

■“女だから”という時代

橘 田:“女だから”と言われながらも、ここまでになるまでには相当な苦勞があったと思います。にもかかわらずここまでこれたのはどうしてなので

■橋田佳音利 プロフィール

橋田 佳音利(きつだ かおり)

1958年東京都生まれ

大学卒業後住友電気工業(株)に入社

結婚のため退社 結婚後半年で仕事復帰

営業・営業事務・CAD請負業・モデル・経理・仕入/売り上げ管理・販売・人事・福利厚生事務・給与計算・入札業務・実用新案申請業務・CGIプログラマー・新聞社(フリーペーパー)営業/記者 など実務経験を重ねる。と共に、男女差別・母子家庭差別・年齢差別の3つの差別を受け、同じように悩む女性の支援こそ自らの使命であると強く認識する。

それらの仕事経験や個人の体験から女性・ミドルエイジの就業支援のため雇用・創出のトータルサポートをするべく、2003年3月株式会社Frajouterie(フラジュテリー)設立

株式会社 Frajouterie(フラジュテリー)代表取締役

エグゼクティブマチュアバイザー

・NLPプラクティショナー認定

・日本メンタルヘルス協会基礎心理カウンセラー認定

・日本能力開発推進協会メンタル心理カウンセラー資格

主な著書

「煌めくミドルと諦めミドル」(長崎出版)

受賞歴

・第9回日経ウーマン ウーマン・オブ・ザ・イヤー2008受賞

・第3回サンケイリビング新聞社

女性起業家支援キャンペーン受賞

しょうか?

小 野:私はサラリーマンの家庭ではなく商売人の娘として生まれましたので、これが大きく影響していると思います。父が商売人として仕事をしているのをずっと見ていましたし、父は娘の私を教育していたのだと思います。

私にとって、父の影響は非常に大きくて、もの心ついた3歳の頃には「会社は自分がお給料もらうために、その3倍のものを稼がなければならない」ということを既に知っていました。その時のことは今でもすごくよく覚えています。

橋 田:現在のサラリーマンは「自分のお給料の3倍稼がないと、お給料をもらえるに値しない」なんていうこと、知らない人もいるくらいなのに、小野社長は生まれながらにして違うのだ!と、お話を伺い感心するのみでした。

小 野:私は、負けず嫌いでもあるので、周りで「できるわけない」と思われれば思われるほど頑張ってしまうんですね。子供のころ育った環境があったので、大変だと思うこともありませんでした。社長を引き受けた当時も、若かったこともあるのか「気合と根性」で乗り越えられましたし、当時は、自分でなんでもできるという精神力と体力のある年齢だったのだと思います。

橋 田:つい即座に年齢を伺がってしまい、慌てて伺ってよろしいですか?と尋ねる私へのその返答が、「私プライバシー無いから」とおっしゃる。なんとも大きいものを感じてしまいました。このような方だからこそ、これまでの時代の中で、ここまで到達することができたのだ、と敬服してしまいます。

小 野:結婚して子供も産んで、仕事ができたというのは家族がいたからだと思います。父が亡くなった後、母を引き取り一緒に住んでいたこともあり、母に家事をお願いしていた時期もありました。母が他界したあとは、息子が早い時期に結婚しましたので、お嫁さんが家事をしていていました。実際に私が家事をしていた時期は短かったかもしれませんが、とはいえ、子育てだけは夫の力を借りながらも、自分でやってきたつもりです。

忙しいときには、定時で一度家に帰り、子供と食事をし、お風呂に入れて、また会社に出てくるということもありましたし、それがかなわないときは、パソコンを家に持ち帰って明け方まで仕事をしていた時期もありました。当時は仕事が楽しくて楽しくてしかたなかったですね。

橋 田:だから今があるのだ、と本当に小野社長の頑張りを伺うだけでため息が出てきました。こんな社長だからこそ、今女性活躍支援が社内でもうまく運び、そして、印刷業界のダイバーシティのトップとして牽引できているのだ、と心から納得いたしました。

今回は、こんな素晴らし小野社長が「ダイバーシティ」や「女性活躍支援」に関してどのようなお考えをお持ちかお聞きしていきます。(次号につづく)